

(a) Poder Ejecutivo Federal,  
*Plan Nacional de Desarrollo 1989~1994*

S. P. P., México, 1989, 143 pp.

(b) Consejo Nacional de Población,  
*Programa Nacional de Población 1989~1994*

CONAPO, México, D. F., 1989, 62 pp.

今日まで、日本では、人口学を専門とする研究者の間でラテンアメリカ地域の人口政策、人口問題は、同じ発展途上国でもアジア諸国に較べ関心の対象になることが少なかった。上掲2書はメキシコにおける現政権の基本構想である『(a) 国家開発計画』とこれに基づく人口に関する (b) 執行プログラムである。

メキシコの場合、ブカレスト世界人口会議(1974年)前後から、人口問題の存在を深く認識し相次ぐ法律改正、公的機関の創設等を通じて人口状況の変化のため政府が主体的に取り組み、民間機関を含めた人口活動により出生力転換に成果を示しつつある。本書によって、途上国での国家開発における人口問題の位置づけ等、一国の例とはいえ、その人口政策と取り組み姿勢の一端を知ることができる。

『(a) 国家開発計画』は、全7章から構成され、このうち、特に人口とその周辺の問題を扱っているのは6章である。同章では、国民の生活水準向上を中心テーマに、雇用の創設、労働者の生活水準の維持、絶対的貧困の追放等に言及し、社会福祉の項で人口を取り扱っている。

かつて、O. Lewisが『貧困の文化 (Five Families; Mexican Case in the Culture of Poverty, 1959)』でメキシコの都市下層家族について、向上心の欠如、家族関係の崩壊、無気力性、暴力性等を見出し、この状態が世代から世代へと再生産される。すなわち、文化としての貧困の存在を詳述し、都鄙あるいは国、地域を超えて普遍的であると指摘した。こうしたサブ・カルチャーを貧困者自身の問題として捉えたLewisの考え方は、後に批判されるが、農村から都市への移動や貧困の問題は、今日でも人口と開発に密接な関係をもっている。ECLACによれば、生活の必要最低限(栄養、住居、衣料)を満たすことのできない貧困層が、メキシコ全人口中約3割を占め、今後、その比率は減少しても絶対数は増加すると予測している。また、貧困に係わる指標と出生行動(出生力水準)との間には密接な相関があることは周知であるが、国家予算の分配にはこれらのことが考慮され、「社会的・経済的インフラ整備(教育、医療、住宅等)、低所得層の要求に優先順位を置く」とし、国民の社会的公正にまで及ぶ構造改革を掲げ、いわゆる社会政策・社会計画型の施策と理解される。

人口問題自体については、「人口動態、人口分布の問題は、国家開発上の根本問題である、同時に経済活動の地方分散も優先事項である」(6章)とし、さらに、本書(b)冒頭にも大統領自身の言葉として「人口と開発は永続的でしかも密接な関係をもつ、……大いなる挑戦をせねばならない。しかし、同時に新しい水平線が切り開かれている」と述べ、人口問題の解決が国家・社会開発の一環と認識され、また重要な戦略変数とも位置づけられている。

人口問題解決のための重点施策として、開発計画には、(i) 人口に関する教育的活動、家族計画の強化を通じて出生力の低下を引き続き促進し、(ii) 地域開発を促進し国内人口移動及び分布の是正を図る、という2点が掲示されている。前の2政権と同内容であるが、前政権では方策メソッドとして、人口教育の位置づけが高かったのに対し、現政権では、『国家開発計画』で家族計画の強化を謳うことになった。それは、90%がカトリック教徒である国民の間にも家族計画が浸透し根づいたと判断した由であろうか。

本書(a)は、その性格上、鳥瞰的な内容になっている。このマスタープランに基づく、人口関係の具体的執行プログラムが(b)で、人口政策の枠組、診断及び目的・サブプログラム・評価と題される3章から構成されている。第1章は、本格的な人口政策の開始される1974年以前を含めた人口政策小史と言ってよく、人口問題への取り組みが、民間組織を含めて法的、制度的にレビューされている。診断の章では、1974年以降の人口動向の状況と将来予測及び人口活動(機能別プログラム)の検討がなされ、第3章では、具体的到達目標数字を掲げるなどし、また同時にこの「国家人口プログラム」のサブプログラム、例えば「女性参加のプログラム」「人口教育プログラム」「人口コミュニケーションプログラム」等の現政権での目標が掲示してある。また、人口に関する省別プログラムには、他に「国家保健プログラム」「国家家族計画プログラム」等があり併読されるとこの分野に関する理解が深まるであろう。

(西岡八郎記)